

IgM 型と IgG 型複合の温式自己抗体を保有した一症例について

◎岡本 彩¹⁾、重山 郁子¹⁾、遠田 久美子¹⁾、小川 哲¹⁾
石川県立中央病院¹⁾

【はじめに】赤血球に対する温式の自己抗体の多くは IgG 抗体であり、IgM 抗体、IgA 抗体が関与することは稀である。今回、自己抗体の影響で血液型が判定できず、IgM 型と IgG 型複合の温式自己抗体を保有した症例を経験したので報告をする。

【症例】患者は 95 歳、女性。疾患名は高 K 血症。当院での血液型検査歴、輸血歴あり。X 年 12 月にふらつきを認めたため、当院腎臓内科受診。輸血前検査にて、血液型検査はオモテ検査、ウラ検査ともに異常な凝集、コントロールカラム陽性となり、予期せぬ反応を認めたため判定保留、不規則抗体スクリーニング検査陽性となったため、追加検査を実施した。37°C 生食で血球洗浄を行いオモテ検査を実施したが判定は出来ず、寒冷凝集素を疑われる所見は認められなかったため、オモテ検査は赤血球の DTT 処理を行い、ウラ検査は 37°C 加温後に血液型の判定を行った。その結果、A 型 RhD 陽性と判定され、過去に実施した血液型検査の結果と同様であった。不規則抗体同定検査では自己対照を含めた全ての血球に凝集を認めた。直接抗グロブリン試験は抗 IgG、抗補体に凝集を認めたが、生食対照にも凝集を認めたため、判定保留とした。赤血球抗体解離試験を実施したところ、全てのパネル赤血球に凝集を認め、型特異性のない自己抗体が認められた。血漿中に検出された抗体も自己抗体が疑われたため、自己血球で抗体吸収を行い、吸収後の上清で不規則抗体スクリーニング検査を実施したところ同種抗体は認めなかった。今回、検出された自己抗体は IgM 型と考えられたため、赤血球抗体解離液と血漿の DTT 処理を行った。その結果、解離液中、血漿中ともに型特異性のない自己抗体の反応性は消失し、抗 E の特異性を認める抗体が検出された。患者の Rh フェノタイプ DCcEe より、患者は 37°C 反応性の IgM 型の型特異性のない自己抗体と IgG 型の自己抗 E を保有することが判明した。

【まとめ】今回のような自己抗体が検出された場合、IgG 型の自己抗体のみではなく、IgA 型もしくは IgM 型の自己抗体の関与を考慮し、検査を進めていく必要があると考えられた。また自己抗体などで検査や輸血準備に時間を要する場合には医師との連携が重要となり、今後も安全な輸血の提供に努めていきたい。

連絡先：076-237-8211